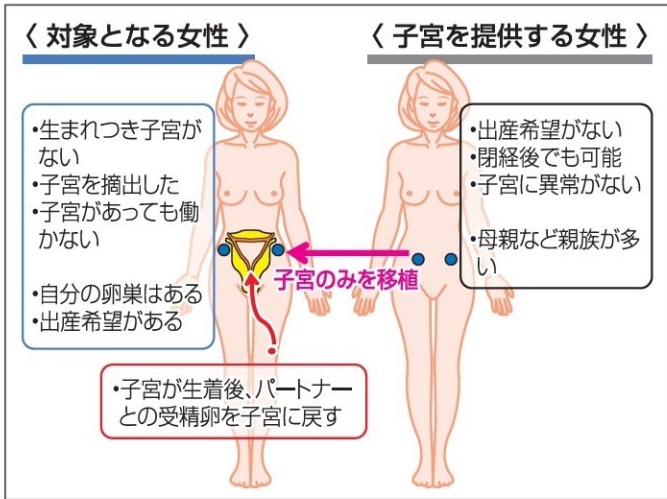




生殖に関する医療技術が進歩し、子に恵まれないカップルが、子を得られる機会が急速に増えてきています。しかし、子宮がない女性が自らのおなかで子を育て、出産することは不可能でした。この不可能を可能にする「子宮移植」が新聞やテレビで度々取り上げられています。今回は「子宮移植」を考えてみましょう。

子宮移植



子を得ることが目的



産婦人科医

今井篤志氏

ならない臓器です。子宮移植は赤ちゃんを得ることが目的です。子宮の提供者は拒絶反応のことも配慮して、母親などの親族がほとんどです。閉経後の子宮であっても、卵巣がしっかり働いている女性に移植した場合には、胎児を育て

性Ⅱ図Ⅱに子宮の機能は回復します。は、とても朗報です。現在までにサウジアラビア、トルコ、スウェーデン、中国、米国で10例以上の子宮移植が行われており、スウェーデンでの5例が出産に至っています。日本では動物実験や準備研究が終わり、人への応用が検討されています。子宮移植を希望するカップルは、まず自分たちの卵と精子を用いて体外受精し(2016年2月29日付本欄参照)、受精卵を凍結保存しておきます。そして移植された子宮が体でちゃんと働いていることを確認した後、その受精卵を子宮内に戻します。妊娠した場合には通常の妊娠よりもさ

閉経後でも提供可能

切開で出産します。子宮移植は出産という目的を達成した後に子宮を摘出します。通常の臓器移植は移植後、免疫抑制剤を一生服用しなければなりません。移植した子宮を摘出しますと免疫抑制剤を中止することができません。移植は臓器移植法という法律で規制されており、心臓や肝臓など生命の維持や救命に必要な臓器を対象にしています。しかし、子宮移植は臓器移植法の対象外のため、脳死移植は認められず、生体からしか移植できません。子宮がない女性が赤ちゃんを産むためには、体外受精した受精卵を第三者の子宮に入れて産んでもらうという代理出産がありますが、出産時のリスクや親子関係などの問題を抱えており、日本を含め多くの国々で認められていません。子宮移植が現在のところ唯一の手段となっています。(松波総合病院腫瘍内分沁センター長、羽島郡笠松町田代)